



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報 No.43 2016.8

目次

巻頭言	1
特集 ライブラリカフェ	3
本との出会いを楽しむ<16回>	5
図書館に関する話題<16回>	6
他大学図書館紹介	8
Library News	9
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	11

元気な附属図書館であるように

弘前大学附属図書館館長 中根 明夫



本年2月1日付けで附属図書館長を拝命しました中根と申します。私と附属図書館(本館)との関わりは、平成20年に弘前大学出版会編集長を仰せつかってからのことです。4年間にわたって毎週、医学部から附属図書館に通い、出版会事務局の方々と仕事をしました。そして、4年ぶりに附属図書館との縁が復活しました。

私自身を振り返ると、学部学生時代には大学附属図書館で勉強したり、所蔵図書を読んだ記憶がほとんどありません。しかし、大学院生になると、学術雑誌で自分の研究に関する参考論文を検索するために図書館に通うようになりました。さらに、博士課程に進むと、最低週1回は図書館に行って新着ジャーナルを手にとり、関連論文を探す習慣ができました。教員になってからもこの習慣が続きました。新着雑誌のインクの匂いや紙の手触りを楽しみつつも、関連雑誌

では自分の研究が先に越されないだろうかとハラハラドキドキしながら、また Nature, Science, Cell には、いつか自分の名前がある論文が掲載される日が来ることを夢見ながら、珠玉の時間を過ごしました。そして、実験の予定が少ない日には、Chemical abstract や Biological abstract などの冊子体のキーワードで論文を検索し、面白い研究が出来るシーズはないかと模索・夢想していたころが懐かしいです。しかし、ここ10年あまりは電子ジャーナルを研究室で検索することが中心となり、図書館から足が遠のいてしまいました。

図書館というと、これまでは、利用者が黙々と蔵書を検索したり、文献を調査したり、論文やレポートを書いたり、試験勉強をしたり、という静寂につつまれた重厚な雰囲気のあるところであるというのは共通の認識であると思います。

しかし、教育手法や研究手法の変貌、そして電子ジャーナルをはじめとする情報発信がアナログからデジタル化へ進化するなど、大学附属図書館のありかたについてはさまざまな選択肢が生まれています。「大学の象徴の場」「研究のため蔵書や雑誌を検索する場」「貴重資料などの資料をみる場」「教養の源の場」「自学自修の場」「グループ学習の場」「デジタル情報収集の場」などなど、それぞれの立場、経験、年齢などにより百人百様であると思います。しかし、どれかが正しくてどれかが間違っているというわけではなく、どれも図書館の存在意義として正しい意見であると思います。それだけ、附属図書館はさまざまな点において重要な役割を果たしていると思います。また、情報発信のデジタル化によって、図書館機能が附属図書館の建物内だけではなく、パソコンがある部屋、さらにそれにとどまらずタブレットやスマートフォンなど場所を必要としない環境に至るまで、つまり各個人の場に図書館がある、といっても過言ではありません。

ここ数年、大学の教育が「パッシブ・ラーニング」から「アクティヴ・ラーニング」への転換が推奨され、全国の国公立大学附属図書館に「ラーニングコモンズ」と呼ばれる学生が集まって学修をする場が積極的に提供されるようになりました。本学附属図書館も改修時にラーニングコモンズが設置され、学生の学修や授業などに活用されています。従って、図書館は全館「静寂の場」から、一定区域に学生のディスカッションの声が聞こえるという「議論の場」が併存するようになりました。教育環境整備のひとつの成果であると思います。

それでは、研究の場としての附属図書館はどうなのか？附属図書館はもちろん、蔵書や貴重資料を活用した研究の場でもあり続けることが第一です。その一方、先ほど申し上げたとおり、情報のデジタル化により大学キャンパスだけではなく個人の住居や出張先にも図書館機能が使用できる環境になっている現在、附属図書館の機能として研究面の充実に向けられる必要があります。現に文部科学省は、各大学のオープンアクセス及びオープンデータを含むオープンサイエンスの促進を奨励しています。ひとくちにオープンアクセスと言っても、グリーンオープンアクセス（グリーンロード）、すなわち研究者自身がWEBサイトや機関リポジトリでセルフアーカイブができれば良いですが、オープンアクセスジャーナルに投稿するゴールドオープンアクセス（ゴールドロード）になると、かなりの経費を研究者が負担するケースが多く、そう単純に行く問題ではありません。一方、オープンデータはビッグデータを含むサイエンスデータをオープン化することで分野によってはきわめて有用な武器になりますが、一大学で構築することは容易ではないと思われます。オープンサイエンスの遂行は、これからの附属図書館の大きな課題のひとつです。

いずれにせよ、附属図書館は大学の教育研究に深く寄与する立場であり、しばしば縦割りになりがちな教育・研究行政の「横串の役割」を果たすべきであるとは私は考えます。附属図書館の立ち位置として、辞して待つ「静」から、満を持した「動」への転換期であると思いますので、今後とも全学的なご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(なかね あきお)